

「栄花物語」(ころものたま)

【解答例】 都留文科大 昭和61

問一 第二段落Ⅱかくてついたち 第三段落Ⅱかくて帰り給ひ

問二 aⅡ1 bⅡ5 cⅡ6

問三 イⅡ奥山の御すまひ・さる長谷のほとり

ロⅡ四条大納言(藤原公任)が弁の君(定頼)をもてなすこと。

ハⅡ出家すること。

問四 AⅡあなんとすばらしいことだ、この子の晴れ姿を人に見せたいものだ。

B (1)Ⅱあな……ばや (2)Ⅱ見る……様や (3)Ⅱ人の……けむ

問五 1ⅡC—B—A

2 aⅡ立 bⅡ断 cⅡ掛 dⅡ衣 eⅡ縁

問六 出家を目前にしながら、すべてに優れた我が子の姿に断ちがたい執着を覚える。(三六字)

【通釈】 こうして(四条大納言藤原公任は)奥山の御住居も本意にかない、心も落ち着きなさって、その年(万寿二年)も暮れてしまふと、一夜のうちに(新年と)変わった峰の霞もしみじみとご覧になられて、「山里いかで春を知らまし(鶯が鳴かなかつたら雪の消えない山里ではどのようにして春の訪れを知るのでしょうか)」など(古歌を思い浮かべながら)もの思いに更けつていらつしやるうちに、元日も暮れて二日の辰の時(午前八時)ころに、(ご子息の)弁の君(定頼)が参上なされた。公任は)思いがけない折のことだなどお思いになっているうちに、(弁の君は、装束の)御装束をご持参なされたのを、控えの間の方からきちんとお召しになって、(父公任の)御前に出て(新年の)拝礼をし申しあげるのであった。(都の)大勢の人の中に住んでいらつしやる時でさえ、やはり自分の御心には優れているように見えもし、お思いになられもする(我が子弁の君の)ご様子が、まし

てあのような山の中の長谷のあたりでは、光り輝くようにお見えになるので、ああなんとすばらしいことだ、この子の晴れ姿を人に見せたいものだ」と（お思いになり、また）見るかいはあり、立派な現在の有様であるよと（とお思いになり）、（これを）他人の子として見たなら、うらやましく（自分の子として）もちたいと思われるに違いない子であるよ、目鼻立ち、容貌、気立て、身にそなわったった学才、どうして（こうも立派に）そなわったのであるうかと、しみじみとすばらしくお思いになるにつけても、御涙が浮かんだ。さて山里のおもてなしをその地にふさわしく趣深い有様にして、お供の人々にもお酒をお与えになって、（弁の君が）お帰りになるのを名残惜しく見送りなさる。こうして、月初めの四日の早朝、御堂（関白藤原道長公）のもとに、三井寺の別当（心養）僧都（の安否）を尋ねるためにお便りを差しあげなさるので、（僧都は公任の所に）参上なさった。そしてくつろいでお話しなどなさって、（出家の）ご本意のことも申しあげなさると、僧都は泣いて、（公任の）御髪をお剃りになった。（そして、出家者の守るべき）戒などをお授け申しあげなされた。このようにして（僧都が）お帰りになると、（公任の出家したことが）すぐに世間にもれ伝わった。このことをお聞きになって、御堂（道長公）から御装束一そろい整えて差しあげなされるといって、（お詠みになった歌）

いにしへは……僧衣を互いに贈り交わして着ようなどは、昔は思ってもみたであろうか。

ご返事を長谷（の公任）より、

おくれじと……出家の折には互いに遅れまいと約束を交わして着るはずであったが、あなたがた僧衣を着るのに遅れてしまったことである。

と申しあげなされた。